

日本分析化学会

関東支部ニュース 第16号



2006年3月22日 発行

発行者 (社)日本分析化学会関東支部

目次	ページ
1. 関東支部ニュース巻頭言 「地区活動の活性化と産・官・学連携」(支部長)	2
2. 関東支部創立50周年記念会 報告(支部ニュース担当者)	3
3. 第28回 東北・関東支部分析化学若手交流会(若手の会担当者)	5
4. 特集 その1「学生から見た就職活動と企業像」	6
その2「卒業生から見たカイシャ」	10
5. 随想 「アイススケートと私」	10
6. Photo Gallery (関東支部会員の皆様から頂いた写真を掲載しています)	12
7. 事務局だより	14
8. 編集後記(支部ニュース担当者)	14



関東支部幹事会(2006年1月13日)の様子
支部活動に関する様々な議題が話し合われました

◇◇◇ 関東支部ニュース巻頭言



地区活動の活性化と産・官・学連携

関東支部支部長 大橋弘三郎



関東支部ニュースは今年で第16号になるが、この間の歴代の支部長は、巻頭言で支部の将来の展望や支部活動について多くの示唆に富むことを述べられている。支部ニュース担当委員から巻頭言を執筆するよりの依頼に戸惑いを感じたが、副支部長として3年間、2005年度の支部長として関東支部の運営と諸活動に携わり、その間感じたことを記し巻頭言とさせていただきます。

関東地区には分析化学関連の企業、研究所、大学等の高等教育機関が多数あり、関東支部は会員数が約3400名と他支部に比べて大規模で日本分析化学会の会員の約40%を占めている。関東支部が創立されて以来、「会員相互の親睦を図る」をモットーに多くの支部活動が企画されているが、支部の規模が大きいがために、一般会員の支部活動への参画の機会が少なく、学会や支部活動の詳しい情報が一般会員に広く伝わっているかどうか懸念される。日本分析化学会あるいは関東支部の常任幹事会などの委員として、学会活動に参画しない限り一般会員が相互に交流する機会は、年1回の年会や討論会に限られ、比較的少ないと思われる。東京、埼玉、神奈川、つくば地区は東京圏ということで特に支部会員の交流の場が設けられていないが、宇都宮、群馬、山梨地区では数年に一度の講演会が開催されている。新潟地区では研究発表会が毎年開催され今年で19回になり、茨城地区では「茨城地区分析技術交流会」が発足し2年目を迎え、交流会には非会員も多数参加している。これは、分析化学会の会員、非会員を問わず、化学に携わる方々が分析化学の基礎知識や技術に関する様々な情報を必要としていることの表れではないかと思われる。

今年には日本分析化学会関東支部の創立50周年の年にあたり、工学院大学を会場にして11月18日に関東支部会員で50周年記念を盛大に祝した。支部ニュースの「関東支部創立50周年記念会報告」にあるように、記念事業の一つとして、産・官・学のそれぞれの分野でご活躍されておられる5名をパネリストとしてお招きし、「分析化学における産・官・学連携」についてパネルディスカッションがおこなわれ、大変高評を得た。また、例年通り関東支部会員のための活動の一環として、環境分析基礎講座や機器分析講習会が実施された。特に機器分析講習会は関東支部創立4年後に始まり、今年で第46回目となる。会員のためのわかりやすい講習会が、多くの企業の協力のもとで、産・官・学からの講師により企画、実施されてきた。関東支部だけでなく他支部からも多くの受講生があり、年々充実した講習会に発展してきた。これは企業や大学等の関係する支部会員のご尽力の賜物である。

国立大学などの教育機関の独立法人化により、産・官・学連携が積極的に進められているが、地区活動をとおした産・官・学連携が更に推進されることを期待したい。地区での活動は、地区での会員の交流に繋がるばかりでなく、教育機関と企業との連携、企業間同士の情報交換に繋がると期待される。

日本分析化学会関東支部の会員相互の更なる一層の交流が産・官・学連携につながり、関東支部のみならず日本分析化学の発展に少なからず寄与することを期待したい。

洞察で数々のロボットを開発された経緯が紹介されました。三浦学長の言われた「役に立たないロボットの開発」という言葉が妙に印象深く心に残りました。1920年にカレル・チャペックにより誕生した「ロボット」という造語がSFの中で育まれていった時代へと回帰するような気持ちになりました。ユーモアを交えてのご講演はとても楽しく時間を忘れるほどでした。三浦学長の講演に引き続いて、座長を角田副支部長に交代し、赤岩英夫千葉大学監事から「関東支部半世紀の歩みと分析化学の発展」というタイトルで講演を頂きました。各支部の設立時の回顧から始まり、支部活動の紹介とともに活動ごとにそのはじまりと現状についてユーモアを交えて紹介されました。引き続いて、関東支部の歴史と日本の分析化学の発展とを、「分離・濃縮、定量分析」をキーワードに、分析化学との学際領域の発展を交えて詳細に解説して頂きました。ご講演の最後は、関東支部の明るい未来像についての話題でしめくられました。

第三部のパネルディスカッションは、「分析化学における産官学連携」をテーマに掲げ、遠山副支部長、伊永事業委員の司会進行で進められました。ご出席頂いた5人のパネラー（岡内完治氏（共立理化学研究所社長）、菅野隆二氏（横河アナリティカルシステムズ社長）、中村洋氏（東京理科大学教授）、松本和子氏（早稲田大学教授）、山田友紀子氏（農林水産省消費・安全局課長））の「分析化学における産官学連携」に対するご意見は、50周年記念誌に詳細にまとめられています。5人のパネラー同士による活発な議論が続いたので、会場からの意見を聞く時間を取れなかったのが多少残念でした。

第四部の記念祝賀会は会場を、隣のエステック情報ビル内にあるY'sキャフェテリア・パーティーハウスに移して行われました。祝賀会の進行役は加藤事業委員と田中事業委員が務められました。先ず、不破実行委員長のご挨拶の後、関東支部長と日本分析化学会会長を勤められた二瓶好正先生の乾杯による音頭で、楽しい祝賀の宴が始まりました。途中、不破事業委員長が瑞宝中綬章を叙勲されたという報告が披露され、会に思いがけないお祝いが重なりました。

筆者は、分析化学を始めてまだ20年もたっていませんが、論文でしか名前を拝見したことのない大先生方を目にすることで、一人ひとりに感激しておりました。分析化学年会や討論会でも、おそらく、これほど多くの大先生が集まったことはないように思いました。それと同時に、関東支部の歴史が肌で感じられました。会はなごやかなうちに予定の時間となり、最後に大橋支部長が謝辞を述べられ、祝賀会は盛会裏のうちにお開きとなりました。



休憩時 ロビーにて

◇◇◇ 第28回 東北・関東支部分析化学若手交流会 ◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

若手の会担当 大橋 朗 常任幹事

2005年7月22日(金)・23日(土)にわたって標記交流会が秋保リゾートホテルクレセント(仙台市太白区)で開催された。例年、6月後半もしくは7月前半に2泊3日で開催されていたが、今回は7月後半に1泊2日で行う日程となった。この時期、大学によっては期末試験と日程が重なってしまうため十分な参加人数が集まるかどうかについて一抹の不安があったが、定員80名を大幅に超える多数の申し込みがあった。最終的には一般21名、学生61名、のべ82名の参加者をもって開催された。参加申し込みの多かった大学研究室の一部学生には参加をお断りする結果となり、交流会を楽しみにしていた方々には大変申し訳なく思う。しかし、多人数を収容できる会場確保の困難や一部学生の講演会場からの抜け出しなど多人数化に伴う様々なことが最近の交流会で問題となっており、定員の設定は致し方のないものと理解して頂きたい。

交流会初日は実行委員長の西澤精一氏(東北大院理)による挨拶で幕を開け、次いで壹岐伸彦氏(東北大院環境)による「チアカリックスアレーンとの対話」、久本秀明氏(兵庫県立大院物質理)による「化学センサーからマイクロリアクター・化学機能集積化マイクロ化学システムへ」、由井宏治氏(東京理大理)による「レーザー光散乱分光法の新展開」、眞野成康氏(東北大院薬)による「アフィニティーを活用する蛋白質解析」の4件の依頼講演が行われた。いずれの講演においても研究の背景から最新の研究までの様々な内容を素晴らしいプレゼンテーションで非常に分かりやすく且つ聴衆を飽きさせないように解説して頂けた。授業や学会発表等において聴衆の前で話す機会が増えてきた筆者にとって、講演内容同様に、プレゼンテーション技術は非常に参考となった。一流の研究者は一流の話し手でなくてはならないと痛感させられた。初日の講演は非常に素晴らしいものであったが、一つ気になったことはいずれの講演においても学生からの質問がほとんど無かったことである。前回の交流会では学生が積極的に質問を行っていたにもかかわらず、今回このような状態になってしまったのは本当に残念である。

講演終了後、各自ホテルの部屋に行き、短い休憩後、大広間で全員そろって夕食をとった。各研究室の紹介が終わるころには宴もたけなわとなり、盛んに歓談が行われた。その後、膳を片付けるため中締めをし、秋保の温泉を堪能した後に、再び大広間での二次会に突入した。二次会では各自持参の銘酒や銘菓に舌つづみを打ちながら歓談し、更なる交流を深めた。筆者は二次会后、部屋に戻ったが、まだ多くの人たちが三次会として花火を楽しんだり、部屋に集まって酒を飲み明かしたりしたようである。

筆者は大学の用事のため残念ながら二日目の朝早くに会場を後にしたが、後で参加した学生に聞いたところ19件のポスター発表と福島孝典氏(JST相田ナノ空間プロジェクト)による「カーボンナノチューブをモチー

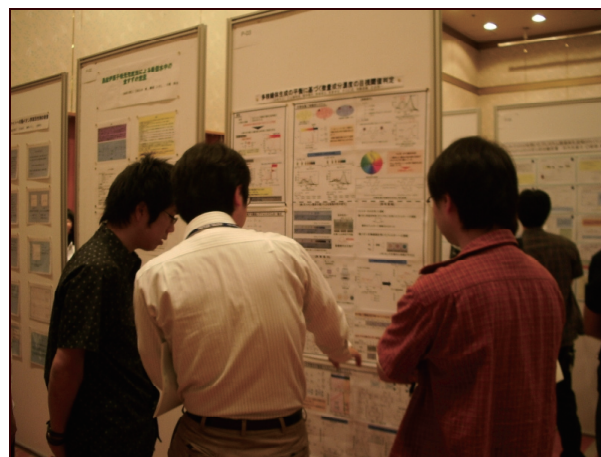


交流会終了時の参加者全員の集合写真

フとした超分子・高分子材料」、藤原一彦氏（秋田大工）による「液液界面におけるキラルな分子会合体の生成と分光測定」、中釜達朗氏（首都大都市環境）による「微小流れ分析における新規試料導入、反応、分離、検出システム」の3件の依頼講演が予定通り行われ、大きな問題もなく無事閉幕することができたとのことである。

今回の交流会は1泊2日であったため例年に比べ忙しいスケジュールであったが、その分充実したものであったと感じられた。あくまでも筆者の私見であるが、聴衆の集中力の持続や活発な議論への参加を考えると今回のような1泊2日で集中して行った方が良いように思われる。なお、次回の若手交流会は、袴田秀樹氏（東薬大薬）の取りまとめで2006年6月8日（木）・9日（金）に高尾の森わくわくビレッジ（八王子市）で開催されることが決まっている。皆さんの積極的な参加を期待しています。

最後に本交流会を取りまとめていただいた西澤精一氏をはじめとする東北大学寺前研究室の方々に心から感謝いたします。



ポスターセッションの様子

◇◇◇ 特 集 ◇◇◇

特集 その1

「学生から見た就職活動と企業像」

東京大学大学院工学系研究科 修士2年 中尾英明

私にとって就職活動は楽しいものであり、また大変勉強にもなりました。初めて社会の様々な仕事に密接に触れる機会であったことも大きな理由の一つですが、何よりも就職活動期間は興味のあるあらゆる業種・職種の話聞くことが出来るからです。興味を持って説明を聞きに来る学生に対しては企業側も一切拒みませんし、仕事や社会人としての生活に対する疑問を全てぶつける事が可能です。就職活動ほど色々な会社の話をもとめて聞ける機会は恐らくないと思います。私は就職活動を通じて、社会の大まかな繋がりや業種間の意外な繋がりなど様々な発見がありました。そして、業種間、企業間の違いは驚くほど大きく、専門分野を問わず色々な会社を見ることはそれだけでも価値のあることです。研究活動などで忙しいとは思いますが、出来る限り興味のある会社の説明会や見学会には参加すると良いと思います。

一方で、“自分がやりたい仕事”と“自分に向いている仕事”には往々にしてズレがあります。各々就職活動の準備期間に自己分析なるものを実施すると思いますが、その中でも親しい友人に自分の長所短所を挙げてもらおうと、思いもよらないことを指摘され驚くと思います。自分のことは分かっているようで中々分かっていないものだな、と私自身も痛烈に感じました。しかも、言われてみれば確かに・・・ということが多く友人の視点は大変参考になります。そうすることで、改めて自分を第三者的に分析し“向いている仕事”を発見できる可能性が高まります。もちろん“やりたい仕事”を優先することは大切ですが、“向いている仕事”

を認識しておくことで、やりたい仕事の中でもより自分に向いている仕事を選択でき、就職活動をするうえで、また複数内定を頂いた場合などに就職先を決定するうえでの大きな指標になると思います。

また集団、個人問わず、面接の際には自分を良く見せようと躍起になるものです。しかし、多くの企業は学生に対して仕事に関する知識を問うているわけではないのです。確かに知っていてマイナスになることはありませんが、知識や業界の常識などは仕事を始めれば自ずと身に付くものだと思います。それよりも、これまでの自分はこんな体験をし、こんなことを考えた、そしてこうしようと考えたなど自身の思考回路や人の形が分かる発言のほうが重要です。なぜ今の君があり、今後どうしたいのか、というのが企業の聞きたい大きな質問の一つだと思います。もちろん、この時に相手の望むことを回答すれば内定をもらえる可能性は高いでしょうが、それではその会社が本当に自分の考えや価値観に一致しているのか分からなくなってしまい、それを自分自身で判断することは大変難しいことだと思います。ここは一つ、自分の言葉で回答し、“こいつはうちの会社に合っている”と思われて採用されるのは如何でしょうか。大人としての礼儀作法は基本ですが、あまり硬くならず学生らしく自分を主張できれば、楽しく充実した就職活動が出来ると思います。

東京大学生産技術研究所 修士2年 千葉 豪

私が就職活動で最も心がけたことは積極的に研究所見学に行くことでした。どのような職種にしてもそうだと思いますが、実際に現場で働いている方の話を聞くこと、できればその現場を見学することが最もその仕事を知ることのできる方法ではないでしょうか。就職活動中に企業の研究所を見学して感じたことをいくつか挙げたいと思います。

企業の研究所が大学と大きく違うと感じたのはセキュリティーの厳しさです。デジカメなどの写真撮影ができる機材や通信機器の持ち込みは禁止です。外部の人間の出入りのチェックも厳重されています。普通の大学の研究室ではここまでの管理はされていません。その雰囲気からだけでも企業の研究と大学の研究の性格の違いを垣間見ることができました。

研究所を見学するとその企業が実際にどれほど研究に力を入れているかが実感としてわかります。これは企業セミナーや説明会で数値や口だけではわからないことだと思います。説明会ではどこの企業も自分の会社が研究に力を入れていると言うに決まっています。いくつもの研究所を比較して見学し、施設や装置を見ることによって企業による研究への力の入れ具合がわかってきました。

興味があったことの1つに研究者の方々が何をキャリアの目標としているのかということがありました。例えば、技術職から入社しても将来は経営側に移ることを目標にしているのかそれとも研究者としてある分野のスペシャリストとなることを目指しているのかということです。実際に多くの研究者の方と話し、何を目標に仕事をしているのかうかがいました。そのことにより企業の技術者がどのようなものかがだんだんとわかってきました。

また研究所見学をした際に、自分の現在の研究を研究者の方々の前でプレゼンさせていただく機会が多々ありました。このとき、大学の先生とは違った企業の研究者という視点から厳しい突っ込みが多々入ります。議論をするうちに自分の研究の問題があらわになり、理解が深まりました。大学に戻ってからの研究にかなり良い影響を与えました。

最後に私は現在分析関係の研究をしているので、企業の分析技術者の話を特に興味を持って聞きました。分析はモノを作る仕事ではないので特殊な仕事です。以前は既存の装置を使ってデータを出すだけでは単純

作業となりつまらない作業になるのではないかと考えていました。しかし、実際に話を聞くと測定方法やデータの解釈などに自分のアイデアを盛り込む余地が多く楽しみのある仕事だということを知りました。

今年度就職活動をする学生のみなさんは是非積極的に研究所見学をすることをお勧めします。

東京大学生産技術研究所 修士2年 岡崎 素也

読者の中には、ちょうど就職活動を控えていて、博士後期課程へ進むか企業で研究するか、もしくは今やっている研究とはまったく関係のない生産技術に関連した職種にするか、はたまた営業や事務などの技術などとの関係のない職種にするかなどと迷っている方も多いのであろう。企業での研究は、大学とは違って研究の自由度は少なくなり、締め切りが設定されるようになり、また、よほどの基礎研究でない限りは利益や成果を求められていることが多いようだ。その意味でプレッシャーを多く感じるようになるらしい。ただ、大学とは異なりいつでも好きな曜日や時間に研究できるというわけではないので、大学の研究室にいる時間の方が企業の研究所にいる時間に比べると多いようだ。人の面で注目すると、私は特に優秀な学生だけが博士後期課程へ進学してそうでない学生が企業へというような構図があるように思い込んでいたが、企業の中でも業界で一目を浴びる研究者もいて、必ずしも大学の頭脳の方が企業の頭脳より上だということはない。企業の研究者の中には、有名な論文誌に投稿されている方もたくさんいる。また、他の職種についても触れておくと、いわゆる工場などで働く生産技術職関連の職種は直接モノ造りに関わることや人と接することが多いことを魅力に感じている人が多いようだ。また、そうした人と多く接する仕事についている人は話が上手で、いろいろな興味深いエピソードを紹介してくれる。営業や事務などの技術と関係のない職種で理系出身の人でも、技術に対する興味は失っているわけではなく、単にその職種への興味が生産技術職や研究職より大きかったようで、もし少しでもそういった職種に興味があるなら、今の立場や研究に捉われず話を聞いて職業選択の判断材料とする方がよい。

最後にアドバイスをしておくと、結局のところ、大学で研究するか企業で研究するかはやはり自分のやりたい研究ができるかどうかということ判断基準にするのが一番ではないかと思う。できるだけ多くの人から話を聞き自分の可能性を探ることで自分が職業や会社を選ぶ判断基準が生まれるはずだ。研究と就職活動の両立は大変だと思うが、うまく時間を使って乗りきって欲しい。



東京大学生産技術研究所 尾張研究室の皆さん、
夏合宿にて

群馬大学大学院工学研究科応用化学専攻博士前期課程2年 茂木 健

何か買い物をするときに気になること。値段、性能、品質、そしてブランド。私達は思った以上に“ブランド”というものに非常に惹かれるものである。例えば、値段、性能、品質で同レベルの商品があったとして、認知度が高い会社の商品と認知度が低い会社の商品があったとしたら…。多くの人は有名な会社の商品を手

するのではないだろうか。それほどに会社のブランド力は大きいものだと思う。実際のところ、私もその一人である。

しかしながら、大切なのは“ブランド(外見)”なのであるだろうか？私が思うに大切なのは“質(中身)”である。昨今では大企業の不祥事が騒がれていることからしても、外見だけが全てではないと思わずにはいられない。私達はブランドに対する見方を考えなければならないのではないだろうか。

ここまで話した内容では、大企業の批判のようなものだがそのように悪いことばかりではない。やはり、大企業は大企業である。商品開発力、営業力共に強い。ここで世の中の大企業が大企業になるまでの道のりを考えてみる。起業したばかりの時は、どの企業も小さい小さい会社であったはずである。それがなぜ大企業にまで発展を遂げたのか…。会社を作っているのは“人”である。大企業へと成長していく過程には、企業で働く“人”の力が非常に大きく関わったはずである。いい商品を作り出す。しかし、営業で頑張らなければダメだし、逆に営業が頑張っているモノづくりで他企業に遅れをとっては、大企業に成長することはできない。会社の人達が丸となって目標に向かって進んだ結果が“大企業”である。

そのような観点から、私が企業を見るときに判断材料として一番優先するものは企業で働く“人”である。人の能力、それはすなわち、“消費者の生活を向上させたい”と思う『熱意』であると思う。『アイデアが重要』と言われているが、まずは『熱意』。アイデアとは熱意の先にあるものであり、熱意のないところには“良い”アイデアなど生まれない。

私は今年大学院2年生で、来年春から社会人となる予定である。今までは外から企業を眺めていたわけであるが、今度は実際にその中に入り企業について知っていくことになる。同じように来春たくさんの方が社会へと羽ばたいていく。大企業に入る人、中小企業に入る人、起業する人、家を継ぐ人。いろんな進路がある。そんな中、超一流企業に就職したからと言って、その肩書きの名の下に会社にぶら下がっているようでは何も意味がない。会社で必要とされるのは自分から動くこと。今の企業が大きく成長したのは、『自分が会社を発展させていく。』という強い熱意を持った“人”の力によるものである。私はそのような熱意溢れる人間となって働いていきたい。



特集 その2 「卒業生から見たカイシャ」

富士通株式会社 福田真大

私は学生の頃には会社というとドラマなどでよく見られる慌しいオフィスの光景を連想していたと思います。また「会社」という言葉自体にも漠然とした重みを感じ、大学とは全く異なる未知の世界をイメージしていました。ですから「会社での研究」は大学における研究とは大きく異なるものがあるだろうと考えていました。

私は現在入社3年目になります。これまでは半導体デバイスやHDDヘッドなどに適用する新規分析技術の基礎研究開発に携わってきました。本原稿執筆の依頼を受けた後、改めて入社してからこれまでのことを振り返り、大学における研究と会社における研究の違いについて考えてみたのですが、学生の頃に漠然とイメージしていたような大きなギャップを感じることはこれまでには無かったように思います。入社以前には

会社での研究に対して、会制約が多く大学と比較すると研究を進める上での自由度が低い、というイメージを抱いていました。大学時代と異なり、就業時間中は会社で仕事をすることが義務となりますし、それ以外でも決まりごとは大学の時と比較すると増えたと思います。ですがそれらに大きく制約されているとは感じませんし、私の場合は自然と受け入れることができました。またギャップを感じなかった最も大きな理由は、研究テーマは異なりますが、大学でも会社でも研究という同じフィールドにいることでしょうか。未知の現象を実験の繰り返しにより解明していく、という一連の流れは変わっていないからです。

入社してから最も大きく変わったのは自身の考え方、意識の持ち方です。入社当初は与えられた仕事をひたすらこなしていく、という受身の姿勢になりがちでした。当然のことかもしれませんが、自分の研究をどの方向性に向かっていくのかは自分がどの方向性に持っていかにかかっている、結局は自分次第だと思います。大切なことはやはり自分で考え判断することであり、それを全うすることが自分の研究(仕事)に対して責任を果たすことになると思います。自分で考え判断する際に、より正しい選択をするためには知識もスキルも必要です。このように語っている私ですが、その両方が既にご活躍されている先輩方と比較すると圧倒的に不足していると実感しています。自分に必要なことを見極めて、様々なことにトライすることを通して自分自身の能力を高めていきたいと考えているこの頃です。



随 想



アイススケートと私

東京都立産業技術研究所 上本道久 常任幹事

私はウィンタースポーツを好む。それもクロスカントリースキーとかアイススケートといった、人に話してもあまり関心を持ってもらえなさそうなスポーツを大いに楽しんでいる。今回はアイススケートのことを少し書き綴ってみる。

京都の生まれ育ちで、雪にも氷にも縁が深いわけではない私がスケートをやるようになったのには、少し訳がある。もともと札幌オリンピックをTVで見ている興味はあったが、スケートはまるで出来ず、当時の流行であった学生時代のスケート合ハイでは辛酸をなめたくちであった。ところが理研でポスドクをしているときに、当時理研にあったスケート部(同好会?)から一緒にやろうと誘われた。初めは逃げ回っていたが、レッスンをやるから大丈夫と連れていかれたのが今はなくなった後樂園アイスパレス。そこで本格的にフィギュアのレッスンを受ける羽目になってしまった。若きインストラクターの美貌に喜んだのは始めだけで、このインカレのメダリストのレッスンはたいそう厳しく、もちろん手など支えてくれる筈もなく、私一人が初心者であったためか転倒・打ち身の連続で、翌日痛みを耐えて湿布を貼って研究室に行くと「上本さんまたスケート?よくやるねえ」と研究室の仲間からかわれた。しかし、同じく転倒を繰り返していても、ここでああやればこうなる、と考える余裕が出てきてからは少しずつ楽しくなってきた。結局3,4シーズンほど、1,2週に1回通って、バニーホップというジャンプの初級動作まで来たときに、彼女がインストラクターを辞めたので残念ながらおしまいになった。

リンクは、雪山が見えるアウトドアリンク(出来れば400mのトラック)が断然よい。実験室にこもる身

の上には、好天で寒風の氷上は別世界である。私は元来人込みが嫌いなので、首都圏のインドアにはあまり行かない。富士山が見える河口湖や浅間山の軽井沢も良かったが、どちらもなくなってしまったので、最近では男体山に抱かれた日光霧降のリンクに行く。永らくフィギュア専門であったが、長野オリンピックを見ていてスピードの靴を履いてみたくなり、試しにやってみたらこれがまた面白い。勿論ただの下手の横好きであるが、それでもヨットで風を受けるような身体移動の感覚がたまらない。家族5人で年一度だけ出かけて、全員で合宿のように朝から夕方まで何日もリンクに入り浸っては、山の神のきついお叱りを受けている次第である。

ところでアイススケートはどうして滑るか、ということが実はまだよくわかっていないことをご存知でしょうか。よく言われる（スケートの教本にも書いてある）摩擦熱による氷表面の融解や圧力による氷の凝固点降下は、どちらも不自然であることが指摘されている。前者を有効にするためにはとんでもない高速でブレードを擦る必要があるし、後者では象に履かせる位の重さが要る、という指摘である。この問題に関して、最近のScientific American 誌に興味深い論文が掲載されている。端的には、氷表面にバルクの氷とも異なる構造を持つ薄い領域があり、それが滑る役割を担う、というものである。私は元々水溶液化学を専門としていたのでこの話には大いに興味を抱く。

スピードスケートというと日本では短距離が人気だが、私は endurance と呼ばれる長距離に心がより引かれる。1周毎にラップを刻みながら数十周、序盤・中盤・終盤をあえぐように滑り切る。まるで人生のように。昨年よりは少しでも長く滑走すべく、今年も何とか一度は氷上へと、頭を巡らせているこの頃である。



日光霧降のリンクにて、息子と。
2004年2月

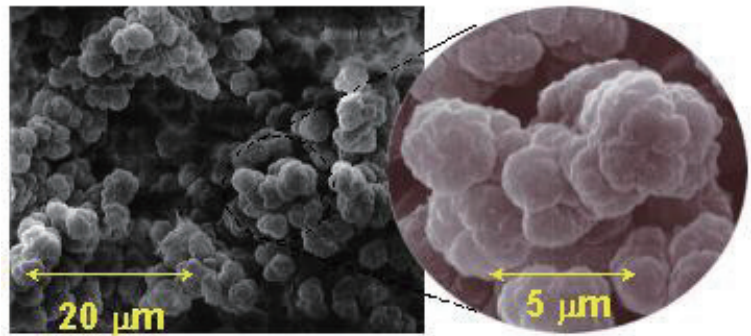


日光連山 2006年1月宇都宮大学工学部エネルギー環境棟より撮影



50周年記念会の祝賀会での
一コマ
Mr. and Ms. 教科書 大集合？
後ろ向きは誰でしょう？

有機ポリマー製モノリス
キャピラリーカラム断面
のSEM像
群馬大 小竹提供



企業合同説明会の風景（皆さん 熱心な様子が伺えます）
東京大学大学院 中尾英明氏 ご提供

◇◇◇ 事務局便り ◇◇◇

関東支部の事務を担当して

日本分析化学会 田中一二三



支部ニュースご担当の上原先生から関東支部を離れるに当たって800字ほど何か書いてくれとの要請がありましたが、たくさんの思い出のうち、その一部の駄文を紙面にご掲載していただく失礼をご容赦ください。

先日、支部創立50周年記念会を開催し、会員の交流が分析化学を伝承し、発展させる場となり得ることを改めて感じさせられました。半世紀間、支部活動を着実に発展させてきた歴代支部長および会員の先生方には深く敬意を表します。

15年ほど前、非力ながら関東支部の事務をお手伝いさせていただくことになりました(配転)。この年は分析化学会の創立40周年に当り、通常は中部支部でこの年の年会を担当するところ、変則的に中部支部と関東支部の年会担当の順番を入れ替えたのだった。また、ICAS'91もこの年の夏に開催され、そのため年会実行委員会では発表申込件数が少ないのではとの危惧があったが、結果的に例年並の申込があり、ほっとした様子だった。他人事のようなだが、ちょうどこの頃から佳境に入った年会実行委員会に出席することになったが自分が何をすべきかが分からず、また、支部の事務局員という意識も欠けていたからである。実行委員長の二瓶先生を始め実行委員の先生方にご迷惑をかけてしまいました。翻ってみるとこの年会では職員として為すべきことを多く学んだと思う。

配転後、間もなく藤原鎮男先生(高分子研究懇談会会長)から明日の午後大学に来るようにとのお電話をいただいた。どういう用件か分からないまま平塚まで行き、バスに乗り細い道路をだいぶ上った気がするが、なかなか到着しなかった。平塚キャンパスに着き藤原先生から大学内をご案内していただき、この辺は夜になるとたぬきが出没すると言うお話をされたときは随分遠くまで来たような気がした。その後、藤原先生、杉谷先生(関東支部長)、秘書の方と一緒にまた平塚に戻るようになった。平塚には中村茂夫先生(高分子研究懇談会委員長)がおられ、皆でレストランに入った。この辺で頭の悪い自分でもさすがに気がついた。私の歓迎会だったのだ。これには今でも大変感謝しております。

関東支部の事業のうち一番印象に残っているのはやはり「分析化学東京シンポジウム」である。時にはプリンスホールの大きな会場に入場できないほど人が詰めかけ、実行委員一同うれしい悲鳴をあげた。一年をかけて企画して成果が如実に現われたときは職員としても最高にうれしかった。回顧すれば一番楽しい時期であったと思う。その反面、大変忙しい時期でもあった。私の担当は関東支部のみではないため、休む間もなく仕事に追われる毎日で頭の中は常に仕事のやりくりで物理的にも体力的にも限界を感じたときが何度もあった。たまたま、20年前から趣味的に通勤電車の中、自宅でいくつか受験勉強をしていたので、これが気分転換になり身体や精神が持ちこたえたのではないかと勝手に解釈している。

一頃、学会財政が先細りすると予測され人員削減や、支部、懇談会から本部へ出捐することも取沙汰され

